

氏名	森村 修 (もりむら おさむ) 教授
こんな研究をしています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代哲学 (現象学を中心とした現代ドイツ哲学・現代フランス哲学)・比較思想 2. 「臨床哲学 (社会政治的トラウマ研究)」・現代倫理学 (ケアの倫理学・生の倫理学) 3. 日本近代哲学 (明治期以後の日本哲学・日本思想) 4. 現代アートの哲学 (アート理論)・美学 5. パフォーマンス研究 (日本の現代演劇・映像論など)
こんな成果を挙げています	<ol style="list-style-type: none"> 1. 【共著】森村修「『社会政治的トラウマ』の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年【臨床哲学・生の倫理学】 2. 【共著】森村修「アマルティア・セン——自由と正義のアイデア」、榎木玲子/法政大学国際文化学部編『『境界』を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年【現代倫理学】 3. 【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題——テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道 共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013年【現代哲学】 4. 【論文】森村修「市川白弦の『空無政府共同體論 (Sūnya-Anarchist-Communism)』——小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化20』、2019年【日本哲学】 5. 【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1)——ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化19』論文編、2018年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】 6. 【論文】森村修「パウル・ツェランという問題 (1) ——ガダマーとデリダの『途切れない対話』(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017年【現代ドイツ・フランス哲学】 7. 【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題——比較思想から間文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第42号、2016年【日本哲学・Intercultural Philosophy】 8. 【論文】森村修「センの『道徳哲学』(1) ——バトナム「事実/価値二分法の崩壊」論を手がかりに(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化17』論文編、2016年【現代倫理学】 9. 【論文】森村修「『性的差異』のケア倫理学——フェミニズム倫理学と和辻倫理学における『肉体』の問題」、『比較思想研究』第41号、2015年【日本哲学・ケアの倫理学】 10. 【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー(1) ——デリダの『精神分析の哲学』(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化16』論文編、2015年【現代哲学】
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・倫理学と政治哲学・社会哲学・経済哲学との関係から、反資本主義運動としての「新しいアナキズム」(アクティヴィズム運動)に関心がある。 ・「ケアの倫理学」をさらに「生の倫理学」としてより広い視野で捉え、様々な障がい者や病者・高齢者たちが生きやすい社会を構築するために、彼らと連帯する可能性を考えている。その際、「Socially Engaged Art」という形で考えられないか模索中。ちなみに「Socially Engaged Buddhism (社会参加仏教)」については、現在研究している。 ・猟奇殺人者やテロリスト、性犯罪者などの凶悪犯罪者の「心の闇」と彼らの脳と、神経倫理学との関係について考えている。それとともに、「犯罪加害者家族」の社会的支援を倫理学の課題として考えている。
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ・哲学テキストを基本にして、その講読を行うことが基本。なるべく外国語文献(英・独・仏)を用いるようにしている。ただ、外国語はあくまでツールであり、語学ができるからといって、思想が理解できるものではない。なるべく「考える」ことに主眼を置いた授業を行なっている。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・2016年度から「比較思想学会」の理事になり、「比較思想」「比較哲学」のあり方を考えている。また、論文査読委員も務めている。 ・『ケアの倫理』(2000年)出版を機に、知的障害者施設「財団法人たんぽぽの家」(奈良市)と関わっている。「たんぽぽの家」には、アートとケアの実践を繋ぐために発足した「アートミーツケア学会」の事務局があり、学会の論文査読委員もつとめた。 ・「森美術館」(六本木ヒルズ併設・六本木)の元総括ディレクター(現・京都市美術館リニューアル準備室ゼネラルマネージャー)やその下で働いていた建築家兼キュレーター(国際文化学部非常勤講師)が友人なので、アートや建築と、思想のコラボレーションを考えている。